

2017年度 石社研 研究のまとめ

石社研では、今年度も研究主題を「社会的事象を公正に判断し、社会と主体的にかかわる力を育む学びの創造」とし、研究を推進してきた。今年度は2年次計画の総括の年にあたる。

今年度の第二次研究協議会では江社研が「仲間と共に、より良い考えを生み出す授業実践の展開」をテーマに、実践・検証を行った。江社研では「社会的事象を多面的にとらえ、公正に判断できる知識の構造図」「自分(達)が考えたことを再考し発信する『場』の設定」「子ども一人ひとりの伸びを的確に見取る評価」を重点として掲げ、研究を推進してきた。具現化する手立てとして「知識の構造図を活用し、中心概念からぶれない単元構成」「再考し発信していくためのステップとして4つの『場』を単元や1単位時間の授業の中に位置づける」ことに取り組んでいた。

3本の授業実践から成果を具体的に考察したい。一つ目に知識の構造図に中心的な「場」の設定を加え、「何をすることでその知識を獲得していくのか」を明確にした上で単元構成を行った点である。どのような「場」を経ていくことでその単元で学ばせたい中心概念に迫っていくのかが、よりわかりやすくなっていた。

二つ目には「地域素材・本物から学ぶ社会科」が強く打ち出されていた点である。**3年長坂実践**では、酪農の仕事について地域の高校生と連携したり、実際に牛舎を見学したりする中で酪農の仕事をする人の願いや工夫に迫っていた。**4年石原実践**では、木製戦闘機の実物や現在と過去の地図を比較させることで、戦争当時の江別の人々の生活や、地域の歴史が今の自分達とつながっていることを学んでいた。**6年高橋実践**では、戦争体験者の方から直接話を聞いたり、森さんの活動を新たに知ったりすることで、戦争の被害と平和について再考しそれまでとは違う視点で考える事ができていた。3本の授業で子どもたちのいきいきと学ぶ姿が、地域素材・本物が持つ力と、それを生かした学びが単元を通して実践されていたことを表している。

課題としては、「自分の考えを発信する場の位置づけ」が挙げられる。意見交流の場が、考えの共有のために行われるのか、多面的に社会的事象を見るために行うのか、学びの整理・成果として考えをまとめるために行うのか。意見交流のさせ方を含めて吟味することで学習者同士、そして社会的事象と学習者という双方向の学びがより深まってくるだろう。

各市町村においても充実した授業実践が見られた。**石社研の5年長坂実践**「工業生産を支える人々」では、教科書の内容と石狩湾新港の中小工場をリンクさせ、すべての時間に地域素材を位置づけた。また、1単位時間ごとに担当を決め、それぞれが授業を作り一つの単元を構成したことも、共同研究として大きな成果である。**当新社研の3年佐藤実践**「農家の仕事」では、当別に今年9月にオープンした道の駅を教材化した。地域の農作物である米や花について、流通経路だけでなく生産者や地域の方の思いや願いに迫る事ができた。新しくできた道の駅を社会科の単元の中で効果的に位置づけた単元構成の工夫が見られた。**千社研の3年森本実践**「お店の様子と仕事」では、「帰りのバス代無料」という地域のスーパーで行われている工夫から子どもたちに再考させ、売り手が消費者の願いに合わせて工夫をしているということに迫った。千社研の今年度の研究の目玉である「授業の前半の書く活動で考えたことを、後半の書く活動で再考する」ことが、1単位時間の授業の構成にはっきりと表れていた。

今年度江社研を中心に、各市町村の実践・研究が積み重ねられたことで、主題に迫ることができたと考える。この2年間の成果を礎に、次年度からの新研究を立ち上げる。今後も、各市町村推進委員と連携を深め、すべての部会員の皆様が、共通理解に立って実践検証できるように研究推進していきたい。

※石教研2次研究協議会の概要については、「石狩の教育」「石社研情報 No185」を参照してください。

※部会運営の反省は、「石社研情報 No186」を参照してください。